

農学は今後も 大学学部教育の規範となりうるか

鈴木 昭憲

秋田県立大学学長

1998年秋における、大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について(答申)－競争的環境の中で個性が輝く大学－」から、最近における国立大学法人化論議、あるいは遠山プランと俗称される「大学(国立大学)の構造改革の方針」にいたるまで、大学のあり方をめぐってあまたの論議がなされている。大学関係者の中には、これらの議論に食傷しておられる方もあろうと思う。しかしながら、21世紀初頭において人類が置かれている状況からみると、大学を中心とする高等教育には、人類にとって真に豊かな未来の創造、人類や社会のそれらを取り巻く自然との調和ある発展等を図るために、多様で新しい価値観や文明觀の提示等が強く求められているのではなかろうか。つねに、社会の知の先導をになう大学が、社会からつねに新しい対応を求められるのはまことに当然であり、大学がこれを避ける合理的理由はない。

ただし、現在の大学論がやや構造や組織に関する議論に偏り、より本質的な大学における教育や研究の内容についての議論が薄く感ぜられるのは残念なことである。そのようななかで、本年7月に国立大学農学系学部長会議が、『我々は「農学」をこのように提言する』を発表されたことに敬意を表したい。提言では、農学の使命として、将来予想される地球規模での食料問題と

環境問題の克服、人類の持続的生存と活動の保障、人類と生物との共存を実現しつつ、生物資源の開発と利用を図ることをあげている。

さて、この使命をはたすために大学の農学教育はいかにあるべきか。この提言においても、多くの提案がなされておりその何れもまことにもっともな提案である。問題は、その提案を、農学教育だけの固有の問題としておくことははたして適切なことであろうか。また、これらの提案が、現在の農学系学部教育の現場でいかに実現されるかということも問題であろう。食料問題、環境問題、あるいは生物との共存等、いずれも、ひとり農学だけの問題ではない。これら課題を農学系学部の教育理念であるとするならば、それに対応する教育のプラン、カリキュラム等の検討が不可欠である。

かつて、1960年代のわが国高度成長期において、当時の農学関係者の間でも、農業が産業として相対的に縮小していく中の農学教育の改革が論じられた。その内容は、1970年東京大学出版会から、石塚貴明編「大学における農学教育—特にカリキュラムの立場から—」として出版されている。わが国農学の歴史と現状、各大学学科におけるカリキュラム、農学教育における一般教育・教養教育、さらには諸外国の農学教育まで広汎にわたり研究されており

興味深い。農学系学部の方々に、一読をお勧めしたい。筆者には、「不易流行」の語が、改めて思い出された。

さて、しばらく前、農学部斜陽論がいわれたころ、各大学農学系学部はそれぞれが学科や専攻改組に取り組み、多彩なカリキュラムを提示して、若者達の農学離れに対応しようとした。その結果、農学分野のカリキュラムはまことに多彩にはなったが、その反面、大学外から見たときにその内容がわかり辛いものになってしまった。ようやく若者の農学離れにも歯止めがか

かったかに見える今こそ、農学部系関係者により、今一度、わが国の農学部教育の体系、カリキュラムを全国的、さらには国際的視野にたって検討し、わが国の農学教育はかかるカリキュラムにおいて、このような能力をもった人材の教育を実現するといった具体的な提案をまとめる時であろう。

農学教育が、21世紀においても、大学教育の規範たりうるか、是非真剣な検討を期待したい。

